

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 西原大輔

本論文は、谷崎潤一郎（1886－1965）の中国との関わりについて、作品及び伝記の両面から論じたものである。谷崎潤一郎は1917年から1926年にかけて、中国および中国文化を題材にした作品を多く発表した。また1918年と1926年には実際、中国を訪れてもいる。谷崎がなぜこの時期そうした作品を集中的に発表したのか、またその後、そうした作品を突如、発表しなくなるのは、なぜなのか。そのことと彼の2度の中国旅行がどう関係するのかというのが、この論文が問うた問いである。

そのことを考える上で、西原氏が採用した視点は、「オリエンタリズム」という概念であった。周知のように、「オリエンタリズム」は米国の比較文学者、エドワード・サイードが著わした『オリエンタリズム』（1978年刊行）によって提唱された概念である。ただし、この概念によって同書で分析された対象は、19世紀に行われた、ヨーロッパのロマン派による異国趣味の美術・文学と学問とであった。東洋といっても、それは中近東を指していた。西原氏はその概念を拡大して、谷崎潤一郎が中国を見る視線の中にヨーロッパの文学者がオリエントに対して抱いた感情と等質なものを見いだすのである。そしてそれは谷崎がヨーロッパ人の著作を読み、また永井荷風の作品を読むことで培われた態度なのであると論じる。そしてその「幻想」が崩されるのは、谷崎が実際に中国を訪れ、中国の実像を見、さらには中国の作家たちと話すようになってからであると氏は論じる。その点からして谷崎の第2回中国旅行は谷崎の転換点となった重要な旅行であり、そこで何があったのかは実証的に調べる必要があると氏は考えたのであった。

以下、論文の構成に従って、氏の叙述をまとめる。

序において、西原氏は谷崎の「支那趣味」を紹介し、その時代的背景について述べる。そしてサイードのオリエンタリズムを導入し、同概念の学問的脈絡を述べる。そうした作業を行った上で、氏はオリエンタリズムを自分なりに再定義し、このあとの議論に備える。氏の議論において重要なのは、オリエンタリズムが近代の所産、特に植民地主義と関係するものだということである。植民地主義という点では、日本もまたヨーロッパと同じ轍を踏んだ。ただし、日本は同時にヨーロッパから見られる対象でもあったから、その点で日本人作家が持つオリエンタリズムはより複雑な様相を呈することになる。その点を谷崎を中心にして論ずることを明らかにする。

第1章「支那趣味」の誕生」では、「支那趣味」という言葉がいつ出現したかを氏は調査する。氏の調査の結果、1922年の『中央公論』新年号で支那趣味という言葉が使われたのがきわめて初期の用例であることが指摘される。この号には「支那趣味の研究」と

いう見出しのもと5編の文章が並べられていた。ただし、ここで言う支那趣味はさまざまなニュアンスを持った言葉であり、その後、支那趣味と言うと感じられるようになる、日本人の中国文物への異国趣味的な偏愛という含意はまだ確立されていなかった。氏の推定によれば、支那趣味という言葉がやや唐突にこの号で出てきたのは、当時の編集長、滝田樗陰（1882-1925）の発案ではなかろうかということである。谷崎もその特集に「支那趣味と云ふこと」という文章を載せているが、そこで谷崎が支那趣味と言った時意味していたのは日本人の漢学的素養、文人的教養であった。しかし、この言葉はその後広く用いられるようになり、そしてその意味も異国趣味と強く結びついてくる。支那趣味がそのように流行する外的要因としては、中国への観光旅行が容易になったということがあるだろうと西原氏は指摘する。中国への観光旅行がどのようなものであったかを、氏は竹内栖鳳（1864-1942）の場合を調べて参考とする。より重要なのは内的要因であるが、それは大正時代の文学に見られるエキゾティシズムの連鎖であるというのが西原氏の意見である。対象が次々と変わっていくにせよ、異国趣味が表現され続けた点は一貫していた。そうした雰囲気の中で谷崎の支那趣味の作品も書かれたのであった。

第2章「文壇に出るまで」では、谷崎の幼少の頃の中国文化との関わりが論じられる。ここでは谷崎の学友の家である「偕楽園」という「支那料理屋」が重要視される。谷崎以前の世代にとっては漢詩文が中国文化を代表するものであったが、谷崎にとっては漢詩文とともに中国の生活文化も重要なものとなっていた。それが谷崎の「支那趣味」を生む素地となっていたことを氏は述べる。

第3章「オリエンタリズムの受容」では、谷崎の「支那趣味」の定着が確認され、その例として「人魚の嘆き」、「魔術師」（ともに1917年発表）が分析される。そこで見られる西洋からの中国への視線がどこに由来するものかという点に関して、西原氏は先行研究を踏まえ、永井荷風の影響を挙げる。荷風の『あめりか物語』（1908年刊）、『ふらんす物語』（1909年刊）が谷崎に大きな影響を及ぼしたろうと氏は推測する。荷風が西洋のオリエンタリズムの言説に強く影響されていることは指摘されてきたことであり、谷崎も荷風経由でそうした言説の影響を受けたというのが西原氏の意見でもある。

第4章「印度趣味・支那趣味の言説を読む」では、1917年に発表した「玄奘三蔵」、「ラホールより」、「ハッサン・カンの妖術」、1918年の「金と銀」の4篇がまず分析される。その印度趣味がどこに由来するものであるかという疑問に対して、西原氏は谷崎がこれらの作品を生み出す際に何を参照したかを問題とし、ここでも西洋のオリエンタリズムの言説の影響をえぐり出す。そしてそうした西洋由来の言説の影響下でつぎつぎと中国への憧憬を歌う作品が生み出されてくるのである。

第5章「第1回中国旅行」以下は、この論文の中心的な作業である。まず1918年の第1回中国旅行の詳細が調査される。これについては先行研究があり、それを捕捉、拡充しながら、この旅行の詳細が示される。この旅行で谷崎が出会ったのは日本人だけだったので、この旅行は彼のオリエンタリズムを強化する方向に働いたというのが西原氏の考えである。「秦淮の夜」（1919年発表）はそうした谷崎の想像の産物であり、まだこの段階では中国は「もの言わぬ他者」であったとされる。

第6章「第2回中国旅行」では、谷崎がそうした幻想から抜け出て、中国を対話の相手

として考え始めるきっかけとなる第2回中国旅行が調査される。この部分は本論文の学問的貢献が良く示されたところである。西原氏はこの旅行に関して、日本語文献だけでなく、中国語文献にもあたって、この旅行で谷崎がどのような行動をとり、どのような人々とつき合いがあったかを明らかにした。特に上海で発行されていた『申報』を調査し、中国側の資料では谷崎がどのように報道されていたかを提示する。さらに中国文学者の文章も検討して、補強材料とした。谷崎の中国旅行についてはそれなりの研究はあったのだが、このように日本、中国の資料を使い、これほど綿密に第2回中国旅行を明らかにしたものはなく、本論文の特筆すべき学問的貢献であると言える。日本語、中国語の文献をともに扱うことの出来る西原氏の能力、またそうした日本語、中国語の資料探索が必要な対象を選んだ着眼の良さが示されたところであった。この旅行において谷崎は、手厳しい批判を中国文学者から受け、また自身、それまでの支那趣味の作品が皮相なものであったことを悟って、以後そうした作品を書かなくなり、むしろ日本を題材にした作品に集中していくというのが西原氏の見解である。

最終の第7章「中国文学者との交流」は、戦後を含めた、その後の谷崎と中国文学者とのつき合いを描いたものである。それは田漢（1898-1968）であり、歐陽予倩（1889-1962）であり、郭沫若（1892-1978）であった。そうした実際の人々の付き合いから、谷崎は中国の実像を知ることになったのである。

以上、述べたように、本論文は日本と中国との文化交流史の一側面としての大正期の「支那趣味」を論じ、谷崎の支那趣味的な作品のオリエンタリズム的な側面を明らかにしたものである。特に谷崎の中国観の転換となる第2次中国旅行を日中の資料を使って細かく再現、検証した点に特色がある。

もちろん、本論文にもさらに書き込むべきことがなかったわけではない。審査委員からオリエンタリズムの受容とその放棄という図式に議論を押し込もうとしすぎてはいないかという批判があったし、またオリエンタリズムと異国趣味の関係をより明確にするためにその二つの概念の差異を明らかにする必要がなかったかという指摘が出た。しかし、そうした指摘も日本語と中国語の文献を使って実証的に第2回中国旅行を調べ、谷崎の中国観の変化を跡付けた西原氏の仕事の意義を減ずるものではなかった。こうした二国間にまたがる研究は、比較文学比較文化研究者にして初めて可能なものだというのは審査員の一致した見解であった。

したがって、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。